

香葉



1988

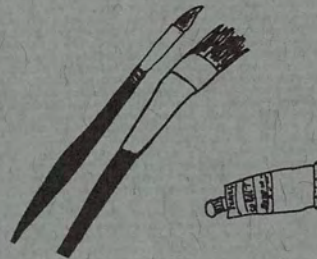
NO.17

目 次

演奏会の御案内	1
「短大の現状」	林 淳 三 2
女専のページ	4
覚 え 書	上 市 二 郎 8
講演会要約	11
お元気ですか	13
追 悼 文	岡 松 和 夫 21
香 報 室	23
母校ニュース	25
香葉会決算	26
クラス会報告	27
賛助会御礼	27
編 集 後 記	28

表 紙.....関 頼 武

カ ッ ト.....成 川 勝 子



又々

短大祭参加

『ハンドベル演奏会』

母校の短大祭に同窓会が参加することが定着してまいりました今年、趣向を変えて、ハンドベル演奏会を行います。今回から学校の都合で日程が変わりましたが、是非ご参加下さい。一応のご返事を10月30日頃までにいただけると幸いです。

日 時 11月3日(木)文化の日 12時～13時30分

場 所 チャペル



関東学院ハンドベル クワイア プロフィール

1973年に、それまで関東学院中・高等学校で、聖歌隊として活動してまいりましたO. C. C. に初めて2オクターブのハンドベルが与えられました。それが関東学院ハンドベル、クワイアのスタートとなりました。以後、学校行事、礼拝への奉仕と校外の奉仕団体教会の行事等に奉仕出演を重ねてまいりました。また、日本におけるハンドベルの草分け的存在として、日本ハンドベル連盟主催の関東地区大会、全国大会にも連続出場をしております。海外演奏も下記の演奏旅行を成功裡に終えております。

- 1983年3月 フィンランド演奏旅行 新聞、TV等で“ヨコハマのハンドベルの魔術師たち”と報道される。
- 1984年8月 第一回世界大会に出場（於米国 北カリフォルニア、アルカータ）
- 1986年8月 第二回世界大会に出場（於日本 御殿場）
- 1987年7月 米国ハンドベル連盟主催第8回全米指導者講習会（於ケンタッキー州ルイビル）に招聘され、太田和男講習担当、リンガーは、閉会コンサートを担当、ニューヨーク州他5州で14回のコンサートを行う。ケンタッキー州より名誉市民の称号を与えられる。
- 1988年8月 第3回世界大会に出場（於英国デブオンシャー州エクセター）世界大会後 イングランド、ウェルズ地方演奏旅行。

太田和男記

短大の現状について

学 長 林 淳 三



関東学院女子短期大学は、まさに爛熟期を迎えようとしています。そして、いま本学は、金沢八景の平潟湾に面し、真白き校舎も七号館を数えるようになり、ミッションスクールを徽章するチャペルの十字架が大空に輝いています。昔、大学構内の

片隅にあり、大学に寄生的に存在していた当時の短大を考えると、正に女子の大学としての完成を印象づけるのではないのでしょうか。すなわち、本学は昭和六十二年四月に念願のチャペルが造られ、キリスト教々の充実がなされるところに、新たに高度情報時代に対応した経営情報科が増設されました。これにより総合短大として弱かった社会科学系が補われ、五学科三専攻もつキリスト教主義女子短大の完成をみたのであります。そして、毎年四千名余の受験生から八百名余が選ばれ、本学の門をくぐっています。それでは最近の本学の活動状況の一部を、同窓会諸姉にご紹介したいと存じます。

まず六十三年五月に、家政科生活芸術の教室として、本学グラウンドの一部に、百二十坪余の陶芸教室が完成しました。家政科は最近、被服構成や調理など、家事技術に結びつく科目から、生活を楽しみ、うるおいを持たせるための科目、例えば生活美学、生活芸術、住居

学などに比重がおかれるようになり、家政科の名称も、この一、二年の間に生活文化科、生活科学科などに変更する傾向が見えてきました。幸にも本学は、このことを予測し、数年前から家政科の中に生活文化専攻（入学定員八十名）を設けていますが、陶芸教育はその一端を荷うものであります。そして、すでに学生は新進陶芸家の先生や助手の指導により、いくつかの作品を製作しつつあります。昨年、経営情報科の増設にともない、ファコム三四〇Rというホストコンピュータが設置されましたが、これを運用するため、本学に電算機室という組織が設けられました。すなわち、このコンピュータは現在、教育用、研究用に使われているほか、入試データ処理や就職業務にも活用され、さらに本年は短大の庶務課において予算管理にも導入されることになり、且下その準備が進められています。

昭和六十二年に設けられた国際交流センターは、関係する先生方の盡力で夏季におけるカナダUBC研修のほか、教科とは別に、毎週月、水、金、二時間の徹底した語学力を養う語学教室が開設されています。これは最近はやっているダブルスクールを本学内で学ぶことであります。現在は中級一クラスであるが、ゆくゆくは上級や初級も開かれることになると思います。センターでは、本学の学生が TOEFL（留学生の英語のテスト）を受け安くするために、六月と十月、TOEFLの試験会場に本学を提供し、お世話しています。先般、中国の北京第二外国语学院の副院長はか三名が来日され、本学との提携について話合いました。本学の国際交流は、英語圏のみでなく、中国や東南アジアとも進められる予定であります。

関東学院二〇〇周年記念として、短大内につくられた生活文化研究所も、四年を経過しました。研究所が研究費を支出して研究して

頂いているテーマは四つですが、そろそろその成果が見られたので、本年度は研究所紀要を発行する予定です。なお、生活文化研究所は、毎年十月から十二月まで公開講座を開設しています。本年も神奈川県と共催で、研究所の研究の一つ「日本型食生活の食物学的研究」をもとに、その他の自然科学系先生方の応援を得て、十回にわたり開かれました。また、研究所では年三回学術講演を行い、教員はもとより学生にも聴講させています。さらに、毎月一回第四水曜日のお昼にコーヒールームとして、諸先生により興味ある話題が提供とれています。

英文、国文、家政、幼児教育、経営情報の各学科は、それぞれの学科の専門性のもとに、講演会や見学会などが行われています。特に新設の経営情報科では、教職員・学生とも意欲に燃えていて、昨年は三十数名の日商簿記三級に合格したが、さらに本年は二級を目ざし、夏休み中も特訓が行われます。

付属幼稚園は、短大の付属になって八年目になりますが、教育実習園として機能を発揮しています。そして、昭和二十三年関東学院幼稚園として発足依頼、本年度で四十年目に当たることから、十月一日には記念式典が行われます。そして、この機会に、園舎外装を短大同様に、白亜に化粧が行われ、正に外見上も女子短大付属となります。真白き園舎は、女子短大チャペルの下で映えるのではないでしょうが。

以上のように、最近の本学の躍進には目ざましいものがあり、ここで書ききれない状態です。したがって、短大の卒業生の方々はもちろん、女専・女子高卒業生の方々も、形の上ではやっとわが母校を誇として頂くようになりました。したがって、私の役割も一応終

わったこととなります。私は明年三月六十五歳の専任として定年になりますので、本年八月通算七期目の学長任期満了とともに、学長職を辞すことになりました。本当に気持ちよく働かせて頂き、同窓生の諸姉には大変お世話になりました。感謝申し上げます。
一九八八年七月末日記

林先生、ありがとうございます。

会長 古城 房子

林先生は、本学に奉職されて以来、途中、一期四年を除く、殆どの在任期間を学長として、短大の基礎作りから今日の発展まで、その生涯を捧げて下さいました。短大の移転から始まり、校舎の建設学科の増設、充実、この一年丈でもチャペル、陶芸教室の落成と、そのお働きぶりは驚異的で、数々の公職や内外の折衝など殺人的スケジュールをこなしながらのご活躍には、蔭で先生の健康を支える奥様のご苦労も惚べれます。学長としての経営手腕と指導力には只々敬服あるのみで、これには先生方や職員の方々のご協力があったこそと思います。それも先生の短大に対する情熱と、人物の大きいお人柄の魅力によるものでしょう。先生は香葉会の為にも、云いつくせない程の援助を下さいました。一万四千名の卒業生を抱えた香葉会事務局が、学内の皆様のご協力のお蔭で何とか支障なく活動が出来、短大祭参加の行事に数々の協力を戴けますのも、先生の、卒業生を大事に思ったださるお心、香葉会を育てる事に強力な援助のあったお蔭と卒業生一同心から感謝しております。長い長い間、本当にご苦勞様でございました。ありがとうございます。これから先生ご自身のご研究と教育に御活躍を期待しております。

女専のページ

このページは、女専の卒業生の皆様のページです。今年、女専の集いを中心に編集いたしました。



女専同窓会出席者名 計三八名

英文一 飯島 信子

杉崎 日出子 中野 陽

澄谷 亮子 横山 はる代

篠原 愛子 井田 玲子

徐 多恵子 大野 絢子

竹村 久子 小泉 すみ子

行谷 政枝 飯島 敏子

細野 サト子 前納 順子

河野 朝子 平尾 富子

高橋 久美子 飯吉 玲子

家政一 青木 千恵子

斉藤 富代 家政二

佐藤 久子 石黒 和子

佐藤 みさゑ 斉藤 道子

岩田 郁子 英文三

山本 祐 リーディ 実子

吉田 弘子 大金 津義

森岡 茂代 酒井 喜美子

前川 貞子 家政三

原 淑子 安藤 洋子

芹 沢 雪子

英文二

大高 悦子
古知屋 幸江

女専合同クラブ会

女専英二 飯島 敏子

校庭の木々も雨に洗われ、一際緑濃い季節を迎えました。

この度、女専の合同同窓会が六月二十五日六浦の短大で開催されました。雨の中三十九人の同窓生が集まり、林先生（現学長）、古城会長、庶務の松本さんの三人をお迎えして、女専創立から短大四十年の歩みについて、林先生よりお話しを伺い、今日の立派な短大に発展した事、内容の充実と共に生徒数も一七六三人に達した事などのお話しに、これはひとえに先生の長年にわたる並々ならぬご努力の賜物である事に深い感銘を覚えました。昼食後は、思い思いの語らいに花が咲き、私達の心は学生時代に戻り、楽しい一時でした。記念撮影の後、松本さんの案内で先ず図書館へ。六万冊の本に囲まれて、三、四人の学生が勉強していました。次は立派に完成したチャペルへ。ベンチに座り静かに目を閉じれば、懐かしい思い出の数々が蘇って、感慨も一入でした。最後に陶芸教室へ。其処には学生の作品が並べられており、陶芸の楽しさを物語っているかに思われました。

三箇所の見学を終えて、此の様な最新の設

備の中で、勉強出来る現在の学生は、本当に幸せであると思いました。

私達は、母校の益々の発展を祈りながら、三々五々学院を後にしました。

女專の集い アンケート結果

我々の短大の前進を作ってくださいました先輩方にアンケートをとらしていただきました。

1、生まれ変わった短大をごらんになってどのように感じましたか？

2、チャペルについて、どのように感じましたか？

このようなアンケートに、すばらしかったの答えが殆どでした。

又、学生生活をやり直したい、卒業生であることが名誉である、等の意見もありました。

女專の集いに参加できなかった方、短大の諸先輩方、是非、新しくなった短大に、おかけになって下さい。建物の中には香葉会の部屋もあります。是非、お立ち寄り下さい。

孤軍奮闘しない田舎教師

女專英三 大金津 義

「〇〇大出身者にあらずんば教師にあらず」ある中学校の校長が公式の場で発言した。彼

が私が〇〇大出身だと思ひ込んでいたので、敢えて私の前でそう言ったのである。平均的

人間なら「よし、今に見ていろ」と、むきになるに違いないのだが、私は新卒時から今日

まで、そんな気になつたことは一度もない。それどころか関東学院出身であつてよかつた

と思うことの方が、はるかに強いのである。忘れもしないが、私が静岡県に就職した丁

度その年、第一回県下一斉英語実力テストが実施された。その中に「I shall」か「I will」かを問

う問題があつた。今日では当たり前だが、当時私が関東で学んだ英語は「I」であつて、「shall」

か「will」かなど英語教育の本筋ではなかつた。〇〇大出身でない私は、誰に憚ることもなく

抗議し、当事者を慌てさせた。そのためか、翌年からこの様な愚問は姿を消すことになつ

たが、私は反対にクローズアップした。戦後四十年を経た今日でも「生きた英語教育」と

叫ばれるのは、生きた英語を駆使し得る教師が少ないからであらうか。私は関東育ちだから、英語の歌、英語のゲームを多く知ってい

たし、周囲には美しい英語を話す友人がいて、話し言葉としての英語には慣れていた。だから外国人が来て物怖しせずに対応できたし、英語を使って授業を進めるぐらゐのことは可能であつた。出来の悪い私の英語だから高が知れているのに、このことは教師仲間では噂の種となつた。

先輩も後輩もない静岡の片田舎で、たった一人、徒らに突張ることもなく、関東で教えられた教えを唯一の元手として英語教育に専念している。姉妹都市の仕事だ、やれアセアンとの交流事業だといつては、地域社会の奉仕活動に重宝がられるのも関東育ち故である。私は信じている。この夏もフィジーからの青年使節団との交流に一役かう予定である。



雑詠

女専家一 吉田(村垣) 弘子

久に来し同窓会や顔の花

見上ぐればチャベルの十字架梅雨空に

軽やかに更衣して吟行に

坪庭に咲きて晴やか雪柳

もてなしの一つにと置く春炬燵

野梅咲き淡路すだれは未だ蕾

(世田谷羽根木公園にて)

早春の古都の海辺に鳩群舞

(鎌倉由比ヶ浜にて)

女専家一 佐藤(井上) 久子

チャベル落成

時移りところかわりし学び舎もチャベルに入れば心やすらぐ

松垣先生召天の折

天国に旅立ち給いし師の君のみたまよ安かれさんび歌うたう

カイロ観光

エジプトのカーペット織る少年の澄みしみなざし臉に残れり

イスタンブール

東西を結び渡せるボスポラスの橋忽ちに霧にかすめり

スイスにて

みどり濃く静まりかえる湖畔にてかすかにきこゆカウベルの音

丹沢湖遊行

紅柏の葉越しに青き湖見えて丹沢の里の春は行くなり

晩秋の頃

ブランコの風にゆれいる陽だまりも遊ぶ子等なく秋深みたり

女専英二 出 榮美子

生き別れも三十年を超越して
今は孫の写真 アメリカに送る

嫁にやるまでとの養育費 今度は
孫への玩具代と 貰う

愛のかたみと 思い籠めにし娘より
もっと似通いし男孫の可愛いくて

孫の子守がてら 昔の恋の話をしろと
娘が友達の主婦ら 連れてくる

許されぬ恋も 時過ぎれば
娘の友人の主婦らの憧れの話

送金のドル小切手も、目減りして
良い頃 子供 大学終えぬ

藤原氏の血すじ故 私の混血の娘を
苦しんで愛した父 あわれ

賢所へ上るわけでも無いのに血をひく
女ゆえ私に期待した母も あわれ

あなたは平民から嫁いで来たくせに
と云う私に だから血を尊んでと頼んだ母

アメリカの彼にマイプリンセスと呼ばれ
私だけと思ったら世の恋人は皆プリンセス

物置に積み上げし航空便の恋文三十年分
私が死んだら燃して 今は 嫌や

オリンパスの神の姿と私が気に入ってた
彼との孫は 公園の小僧小僧像

定年も間近かなれど 毛皮の月賦おえたの
で 会社やめる 私は女

会社勤めの中 毎日が日曜の日々夢みて
五葉松手入れの本 買って置く

会社やめたら寂しいでしょうとポーナスの
たび おごってくれる会社の女の子

焼肉屋へ 娘夫婦 その親たち 孫と
ぞろぞろ行く 私の庶民性

予約申し込み受付中

卒業生名簿完成！

1冊 ￥2,500円
(送料込)

コンピュータを駆使し、最新情報を
インプットしました。是非お手元に
一冊。

同封の振込用紙で申し込み下さい。

覚え書（十六）

— 女事・短大小史 —

上市二郎

前号は関東学院女子教育四十年という記念すべき年で種々行事が行われた。このような時に個人的な理由から原稿作成が出来なかったことは非常に残念でした。会員の方々にも誠に申し訳なく思っていますし、特に編集委員の方には大変ご迷惑をおかけいたしました深くお詫びする次第です。

さて、前回は昭和三十年の夏の行事が発表になる時まででした。この年の六月二十日（月）にはキリスト教研究所の献堂式が行われた。旧短大館（現在の大学十号館）に隣接する建物。その研究所の礼拝堂は役二百名収容でき、短大英文科第二部の学生の入学式、卒業式宗教講演会、礼拝等に使用させてもらった場所、夜間の学生には思い出の深い建物でもある。

例年の如く夏の行事を迎える時期が来た。音楽コンクール（校内合唱コンクール）を始め、英語と家政の夏期講習会が行われた。会場予約の関係で、七月六日（水）から八日（金）にかけて宗教部主催による天城山荘のリトリートが行われていた。費用はお米持参で一泊四百五十円。この時の主題は「キリストを中心とする生活」であった。英文科第二部は七月九日（土）十日（日）の一泊二日、自治会主催の修養会が葉山のレジーナ館で開かれた夜間の英語夏期講習会は七月十八日（月）から八月六日（土）にかけて行われ、英文科第二部のキャンプは七月二十九日（金）三十日（土）と長野県的美ヶ原で行ったが三十名の参加者があった。七月十一日（月）から二十一日（木）にか

ては北海道旅行が実施されていた。しかし、この年は団体割引三十名以上の参加者にならず、丁度この時、フェリス女学院短大も人員が満たないとのことで、二つの短大が話し合いをして合同で実施することができた。八月五日（金）から十日（水）にかけては、体育部有志の計画による夏のキャンプが軽井沢で行われた。この折は兵藤、光畑両先生が付き添って実施されたが、生憎の雨でプログラムも予定通りにはゆかなかつたとの記録がある。

全ての夏の行事は無事終了して九月を迎え、前期定期試験前の最終講義が二週間ほど続き、授業終了が九月三十日（金）だった。この頃は約一週間の定期試験で、後期の開始は昼・夜間部共に十月十七日（月）であった。

関東学院が女子教育を始めて十周年を迎える時期に当たり、女子卒業生の同窓会を作りたいという希望者が多くなってきた。当時の同窓会としては燦葉会（現在関東学院大学関係卒業生による同窓会）に所属していたのである。短大の卒業生が名簿を作りたい、そのための資料を確保することなど諸準備を進めなければ仲々実現しないだろう。それがやがては女子学生の募集にも連なってゆくことにもなるのではないか、という結論に達し、その準備実行委員として松垣、柳生、安藤の各先生と私が決った。委員会で討議を重ね教授会の了承を得て、十月二日（日）午後一時半から三春台校地（霞ヶ丘教会か人数によってはグレスセット記念講堂を借用して）で聞き、茶菓代として百円ぐらい拠出してもらふこととする。当日は、去る六月二十九日（水）羽田へ帰ってこられたばかりの小滝奎子先生に帰朝談をお願いする。そして卒業生では女子専門学校英文科第一回の安村れい子さんに独唱を依頼する。

ということで、その日を迎えた。百十七名の出席者を迎え意義ある会合となり、お茶の会もあって和気あいあいと終始した。その後このことが知れてだろうか、英文科第二部の学生から自分達も独自の同窓会が欲しい、という希望が出されたのである。このような経緯もあって、やがて燦葉会から分離独立して昭和四十五年度から女専・女子高・短大の昼・夜の卒業生で構成する燦葉会なるものが発足したのである。

宗教部主催のリトリートは天城山荘で実施したが、秋は何処か場所を変えて行った方が良いだろうということになり、此の年の秋は清里の清泉寮が候補に上った。この折は参加することができたので少し記憶を辿ってみた。この会は英文科、家政科合同で行われ、山梨県の清里、清泉寮へと向ったのである。期間は十月十三日（木）から十五日（土）迄で、費用は旅費及び宿泊代で千四百円であった。先生方は相川、時田、光畑、柴、松垣、安藤、小滝、柳生、井口、鳥越の全教員が指導に当った。横浜駅表口に午前七時四十分集合した一行は、十時二十分新宿発の列車に合うよう横浜を立った。中央線の列車の人となった学生達は、早朝から行動を起こしたにもかかわらず元気で皆はしゃいでいた。小淵沢へは午後三時三十分、ここで乗り替えて、我が国で一番高い所を走る列車として有名な小海線、小淵沢から三ツ目の清里駅へ着いたのは五時を少々廻っていた。その駅は小さくて無人駅を思わせるような淋しい所だった。一行は駅前から清泉寮へ向かって歩き始めた。やがて牧舎が目に入り、横手には牛が放牧されていたのが印象的だった。秋の日は早くも西の山へ。清泉寮入口ゲートを入ると右手に大食堂を兼ねた集会場の建物があった。広い高原の敷地には、六～七人位収容出来るキャビンが幾つも点在していた。総てが山小屋風の木造建で寒々としていた。寝具の分配や連絡に廻るには大

変不便だったことを思い出す。やがて、夕食時間になって大食堂へ集まっても準備が終わっていないので寮の係員に対し、「お渡ししてあるプログラム通りに進めて下さらなくては困るでしょう……」と安藤先生が注意していたのが目に浮かぶ。その夜は七時から柳生先生により開会式。引き続き「音楽と話しの夕べ」と題して八時三十分から安藤先生担当で行われた。高原の秋は冷え込みが早い。各キャビンに学生は散って行つた。それぞれのキャビンには風呂の設備もされていたが、沸かすのは泊まり客のセルフサービスで、入浴したい者は風呂焚きから始めなければならない。「こんなに寒くては入浴したらかえって風邪引きの原因になるよ……」と誰かの声。「風呂はいらないよ」「多分学生も今夜は疲れていて入浴しないでしよう」などと話していた。夜遅くなると一段と冷え込んできて仲々寝つかれなかった。翌十四日、朝の礼拝が光畑先生担当で始まった。その折り出席してこない或るキャビンのグループがいた。続いて朝食になったが、これにも顔を出さなかった。心配になり後でそのグループに聞いてみたところ、昨夜は余りにも寒いので皆で協力して風呂を沸かし入浴して床に着いたら、朝が早かったせいも皆ぐっすり寝てしまい、朝拜も知らずに寝過ごしてしまつた。恥ずかしいので朝食にも顔を出さなかった。とのことだった。八時三十分から相川先生による講演「関東学院の過去と将来」と題してであった。十時からは分団協議会に入った。「学校生活に関する反省と希望」というテーマで各先生が分れて指導に当たっておられた。午後のプログラムはビクニックとなつていて夕方まで自由に近い散策に出かけた。夜に入って夕食後、七時半からは柴先生の講演になった。演題は「社会と学生」で、司会は小滝先生だった。続いて八時三十分、テーマ別の懇談会となりテーマは就職、恋愛、結

婚、進学、伝導に分かれていた。教員もそれぞれに分かれて指導助言に当たった。次の日、十五日は午前八時三十分から桧垣先生司会により時田先生の説教があった。九時半からは分団研究として昨夜からの続きを締めくくる会となったように記憶する。十一時三十分、柳生先生による閉会式をもってプログラムを終了した。このように綴ってくと当時を思い起こされる会員もおられることであろう。午後二時清泉寮を後にして、清泉駅を二時四十一分発にて一路八王子へ、帰りは横浜線經由で東神奈川駅へ向かい、九時四十分頃横浜へ到着したのである。四年程前に信州を訪れる機会があり、その帰り路懐かしくて清里へ車を廻してみても驚いた。清里駅は近代的様相を呈し、その付近一帯はあたかもお伽の国へ足を踏み入れたかと錯覚するほど、白壁の洋風の建物、原色の屋根、窓には色とりどりの鉢植の草花のある建物等等などで埋めつくされていたのには、本当にびっくりした。このような折、友人宅で手にした地元新聞のコラムに清里のことが載っていたので紹介しよう。『清里が観光地として脚光を浴びるようになったのは、昭和三十年代、そしてブームに火のついたのは昭和四十五年ごろ雑誌「アンアン」や「ノンノ」で紹介され、ディスカバー・ジャパンの旅行ブームで、いわゆる「アンノン族」が押しかけるようになった昭和五十年代には清里から人があふれた。やがて駅舎はモダンに変身、駅周辺に建物も次々と洋風化された。また、この時紙面の広告一欄には甲府市内の一戸建土地付住宅の価額が二千五百万円ぐらいで表示されているのに、清里は同じ面積の土地代だけで五千万円以上の物件ばかりであったのも印象に残っている。

十月下旬から十一月初めにかけて暖房準備が始まる。木造校舎では、現在のようなスチームや温水暖房の時代と異なって石炭ストーブを使

用していた。そのためこの時期になると板金屋が現れ各部屋に煙突を取り付ける作業が始まる。そして例年十二月一日から各室に暖房が入るのである。ところが傭人もいないし、事務職も五、六人のときで人手も少なく、冬期のストーブの係は臨時にアルバイトを頼まざるを得なかった。幸いにも大学の学生寮が学内にあったので、青雲寮やYMC A寮の男子学生に依頼することができた。学生部で斡旋してくれた学生アルバイトは、奉仕的精神ゆたかな人物で良く働いてくれた。薪を準備することから始まって石炭運びそして各室のストーブの焚き付け作業、これらを始業前に行うのだ。また放課後はそれぞれの部屋のストーブの清掃、残灰の処理に至るまで毎日、降る日も北風の寒い日も続けてくれたのだ。ところが授業中「ストーブが消えちゃいました」とクラス委員の連絡があった時は大変でした。アルバイトもこの時間は授業中のため事務所の誰かが仕事途中でも石炭バケツをひききぎて走って行く。行ってみるとストーブの中は石炭がゴロゴロ一杯つまっていて火種は一つもない。授業中ストーブが消えそうになったので石炭を入れて無暗やたらにかき廻した、とか、これでは火種はみんな落ちてあたり前だ。石炭を取り出して改めて焚き付けるといふことがたびたびあった。今となつてはこのような時代が思い出の一つかもしれない。毎日の生活も寒い日は、一段と襟や袖口が真黒になったことを思い出すことだろう。会員の間でも話しの材料になっていることと思う。

田中喜美子先生講演会

「かわる女性の生活」

十年一昔といわれるように、十年たつと昔という名前がついてしまいます。二十年・三十年・五十年とさかのぼると断片的な記憶の中で、その時代の女性達がどのような生活をしてきたか、歴史的な発展をからめて、把握できるということは、非常に稀なことです。

学校では、縄文時代から江戸・明治時代頃については教えて下されます。しかしながら明治以降の歴史について、ましてや女性の歴史などは教えてはくれません。女性の生活がどのように移り変わってきたかについてはっきりと把握することは大変に難しいことです。

朝日新聞のひとつとき欄に、昔の母親の姿が表わされた記事のつたことがあります。大正生まれの母親。自分の為には何一つ要求せず全てを子供達に与えて、黙々と働いている姿こそが、昔の母親であった。今の母親は子供を1人しか生まない。子供の数が減ってきています。数字的なことを見れば大変なことになります。しかしながら、背後に、女性の状況・生活の変化があつて、そのことも考えていかなければなりません。

- 1、平均寿命が八十才まで延びた。
- 2、子供の数が減った。
- 3、女性が社会的な意味で働かなくなった。

以上特に③を考えて見たいと思う。昭和三十年以降、人口の中で女性の働く割合が段々と減ってきている。と言うのは、働く女性とは農業で、明治維新の時には人口の八割が農業でした。家が農家であれば、女性も労働力として果たす役割も多かった。結婚しても、自分の家から、婚家への労働力の移動だけでした。ところが、この構造が農家の女性を働くのが良いとか悪いとか、そういう意識とはかわらず、段々と働かなくなっていくわけです。それは日本の資本主義がやってきて工業化されてきたことによるのです。そして農家の次男・三男が都会にでて働きました。こうした人々と結婚し、奥様・家内という言葉がでてくるように家の中に入ってしまふ女性が多くなってきた。

で、戦後四十年の一貫した女性の生活の基本的変化は、女性が働かなくなったことが中心に考えられている。

昔は三世帯同居の嫁の立場は、発言権もなく、ただ黙々と下積みの仕事をしていた。TVで「おしん」を見たことがあると思います。がこのような女性は、昔はとても多かった。三千五百万人もの人々が郡部から都市部へ出てきて、狭いさき小屋と呼ばれている家で生活している。住居環境は悪くなつてきているが、結婚した時から即、女主人となる。これが基本的な変化である。75%が核家族である。我々が五十代位になると、親の老後をこれらの生活の中にどのように取り組んでいったら良いか、誰しも直面することではあるけれども、若い時にはそのような問題は少ない。これが女性の基本的な変化である。

この変化の背後には、社会の構造が影響しているのである。大家族で行っていた農業形態が、日本の産業の工業化によってサラリーマンがふえてきた。

明治末頃までは、第一次・第二次産業を行っていた。米を作り、麻・木綿などを植えて織維を紡いで、紺屋（家ではしなかった。）へ持っていくって染色をしてもらい、機織りをし

女性が増えているのは雇用者であつていますが、増えているのは雇用者であつ

て家族の着るものまで生産していた。ということとは、終戦後、女は家に入って専業主婦として、家事をやることその他に、生産労働・第二次産業を行っていた。女性が外にでて給料をもらうことよりもむしろ生活に大きく影響していた。セーターを編み、洋服を作り、夫の背広なども手作りした。(洋服学校が生まれた)女性が家にいることについて迷いがあった。

昭和三十年代の高度成長期になると、生活がどんどん楽になってきた。家庭の中の物、掃除機、洗濯機等電化されることによって、主婦の労働力が軽減されてきた。家庭の中で女性を取り止めている部分に「食」の部分がありました。外部の食産業に侵食されて、女性の仕事を取り上げられてきています。男性が、家庭の仕事を外に持ち出して、利益をあげているのが、今の現状なのです。家庭にいたる主婦達は、本当の意味での生活的な仕事がなくなくなってしまい、仕方なく他の仕事(パート等)をしている訳です。

現在までの女性は、結婚しても仕事をやめず、子供が生まれると仕事をやめ家庭に入り、十年たつと、家のローン・子供の教育の為にまた仕事を始める。と云う、M字型の曲線を

示している。二十台で70%から50%に。四十台で60%に上がる労働率である。ところが日本では人口が序々に減りつつあり、将来五人で一人の老人の社会保障をするようになる。働く人口を増やすためにも女性に働いてもらわなくてはならない。

これからの社会は女性の能力を生かし、会社が進歩する世の中になってくるでしょう。

柏市百組の夫婦によるアンケート

あなたは家事・育児の他に妻になにをさせたいですか？

- 1、旅行や芝居などのレジャー
- 2、趣味・教養・習い事
- 3、スポーツ
- 4、市民運動・消費者運動
- 5、近所付き合いなどのおしゃべり
- 6、読書
- 7、テレビ
- 8、昼寝
- 9、園芸・家庭菜園
- 10、ショッピング・おしゃれ
- 11、ボランティア活動
- 12、家事が少々犠牲になっても収入につながる

13、 家事と両立できる小遣い稼ぎ程度の仕事 (パート・アルバイト)

結果(番号で)

性別	2	3	9	1	10	13	8	11	5	4	7	12
男性	2	6	3	9	1	10	13	8	11	5	4	7
女性	2	6	3	1	13	10	11	9	4	8	5	7

この結果を見ていただければわかるように、夫は妻を働かせたくない。妻も働きたくない。つまりフルタイムの仕事は御免である。働くならばパートなどのあまり無理がなく、趣味的な仕事が良いと考えている。

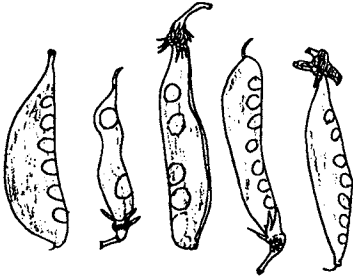
これからの女性、激動の時代、自分の生活は何を中心に作り上げていったら良いのか、一人一人の選択によって決まっていきます。



チャペルでの講演中の田中先生

要約、葛城容子 国文七回卒

お元気ですか！



このコーナーは、なつかしい先生方の近況を伺いました。

今、あの先生は…等 思いをめぐらしながらお読み下さい。

〃〃

余 燼

相川 高秋

十七年前（一九七一年）関東学院を停年になつてから約八年、同大学特約教授として、又、その後も短大非常勤講師として四年、七十七才の最終停年迄、丸六十年間、私はこの学校に勤務した事になる。そして其後五年の年月が経つた。

考えてみれば長い様でもあり、又、短い様でもある教師の一生であつた。

年金だけの生活三年目の昨年は、自叙伝「わが恵み汝に足れり」（ヨルダン社）の執筆、出版記念会等に明け暮れたと言つてよい。

十一年前の「死と虚構」出版の時は、未だ、曲がりなりにも現役だったので、本の売行きはよく、約一〇〇〇名近くの卒業生に読んで貰えたが、今回はもう現役ではなく、その上、自叙伝という本の性質上、売り上げは劣悪で、多くみて三〇〇に達してしない。

敗戦前後の学院の事情、短大（女専）の創設当時の苦勞に關し、その頃の実際の責任者が、見たまゝの現実の生々しい状況を本書の如く事ごまかに書き残した本は他にないので、一人でも多くの関係者に読んで頂き度いと私

は祈る気持ちでいる。（注文は著者宛）

六十年間の教員生活で教室で接した学生、生徒は一万人以上になるが、現在でも、親しくつきあつてゐる教え子は僅か十数名、彼等、彼女達は悉く、学校が小規模で、一人々々の名や性格がハッキリ憶えられた頃の人達である。

最初の教え子で、男は本年中に八十才、女はそろそろ還暦の年になる。私の最近の生活の全部は、其等の人々との手紙、電話のやりとり、極くまれな、二、三の人の來訪、そして毎日欠かした事のない新刊書の精読である。

平均月一回は、学院の同僚、教え子の訃報に接する様になつた。新聞に載せられる程著名になつた卒業生もない事はないので、毎日の新聞で最初に目をやる場所が、この死亡欄なので、嫌でも自分の老いを感じずにはいられない。

日曜は、必ず教会に出席している。この日曜には欠かさず、教え子の某研究所長のT君が家まで迎えに来てくれ、二人で道々時局を語り乍ら、十分あまりの教会への道を歩いてゐる。彼の親分の某大蔵大臣が急死せず首相になつていたら、彼も大臣位にはなつていた程の人物である。

彼は近く中国に関する大著を、彼の十二冊目の著書として出す事になっているが、私は彼と共に著「社会主義の今昔—その夢と幻滅」という様な本を出す事を夢見ている。

併し、年令的に一寸おそすぎた感がない事はないというのが実感であろう。

はなぞむかしの

川端 豊彦

「香葉」編集部からお便りいただき、短大が六浦にあることをはじめて知りました。あの頃、六浦には大学だけで、週に一度、あやしげな物の浮いている泥川沿いの校舎へドイツ語を教えに行ったことなどおぼえています。今の学生には三春台といつても、何の感慨も無いでしょうが、焼け残った校舎で過ごした歳月は忘れられません。敗戦直後のことでしたから新入生諸君の態度も真摯で、わたしから教壇生活の中でも、一番充実した楽しい時だったと思います。なにしろ敗戦直後のoccupied Japanの頃でしたから、何もかも不自由で、ララ物資とやらのおすそわけにいたゞいたバターを半罐、大事に抱えて帰ってあげて、中身がほとんどなくなっているのを見た時の

くやしかったこと。混んだ電車の中の熱気で、すっかりとけて御近所の人の衣服に吸いとりれてしまったらしく、ほんとうに泣くに泣かぬ思いでした。三春台の焼跡で作った甘藷を、宿舎にいたおばさんにふかしていたゞいて、一緒に食べたゼミの諸君も、あれから四十年近くたっている今では、教育ママから教育婆に変身して、世にふる我が身を嘆いてござることでしょう。

第一回の皆さんにも何かと御心配をかけた小金井のわが兔小舎に住んでからもうやがて四十年になります。はじめの頃は夏が来ればはたるが飛びかい、秋になればすだく虫の声に武蔵野を感じさせられたものですが、今年、毎年愉しみにしていたカッコウの声も聞かれなくなりました。まことに烏兔々々の思切なるものがあります。わたしもやがて米寿、三春台の坂路は何とも感じませんでしたが、今登る八王子の山路はいささか身にこたえます。でもまだ髻簪としています。とはいえ、変にむづかしい漢語を使うのも、老化的現象の一つかも知れません。

最後に卒業生諸君の御健康を祈ります。

随想

小 龍 奎 子

本当にありきたりの表現ですが、時間のとび去る早さとは何とおどろくべきものでしょう。二十代半ばで関東学院女子専門学校の教師になった日のこと、そしてあの頃机を並べてニコニコしておられたオジョーサンたちのお顔が昨日のことのように目に浮びますのに、来年の二月には満六十五才、三月には関東学院大学の第一次定年となりました。

短大では専任としては昭和三十四年まで、非常勤としては六十三年三月まで、楽しみに教えさせて頂いていました。その間七年ほどは英国や関西に行っていたりでブランクもありませんが、本当に長い年月、移り変わる学校と学生たちの姿を見て来ました。目に見えるものとしてはまず校舎、兵舎用のすさまじい木造校舎の面かげは、今のすてきな建物からは想像も出来ません。建物が立派になっただけ内容もすばらしくなりました。

でも昔のボロ校舎で暖房もろくにない寒さはびっくりするほどでした。こちらが年令を重ねるにつれて、妹たちのようだった学生

が次第に娘たちのようになり、やがて孫のよう
に思えて来ます。思い出のなかではどの顔
も皆ニコニコしているのが不思議です。

大学の方は来年から後は五年間特約教授
として勤められるのですが、短大の方を昨年
やめてしまったのは、三月に私としては生ま
れてはじめて大病をして大腸の中の結腸とい
うのを十五センチ位切りとる手術などをした
からでした。その後無事に一年が経ち、今は
元氣です。でも人生はいつ何が起るかわか
らないという体験が身にしみた次第です。の
んきにかまえていつでもどなたにでもお会い
出来る、行きたい所へ何時でも行けるよう
な気がしていたのに、そうもゆかなくなること
もあるものだと思ひ知らされました。今後は
短大の同窓会などへもせっせと出たいと思っ
ています。

卒業してもう何十年もたった方々、昨年卒
業したばかりの方々、皆いつもニコニコして
いて下さいますように。教育の効果とは人生
に対応する態度にもっともよくあらわれるも
の。年令がすすむにつれて学校で教えられた
学問の内容については記憶がうすれても、こ
の人生に対応する態度はますますしっかりし
て来る……というのが教育の理想です。何があつ

てもあわてずさわがず、心豊かに生きて下さ
ることを祈っています。

日々を感謝して

井口 安喜子

神はわれらの避ける所また力である

悩める時のいと近き助けである

詩篇 四六篇

皆様、お元氣でいらっしやいますか

香葉会より近況をとの御なつかしい御たより
に、久々にペンをとりました。すぐる叙煦の
時には皆様から沢山のお祝を頂戴致しまし
て厚くお礼申し上げます。

私は唯今、長年住みなれた短大のおとなり
の住宅をはなれる為の整理に、てんやわんや
の毎日でございます。実は、私も年を重ねま
して息子が前々より一人住まいを心配して居
りますので、今春、新築の千葉の孫達のもと
へ行くことになりました。私の部屋も出来て
感謝です。学校へはたった一足で三十余年住
みなれた追浜は、まことに離れ難いのです。
孫は可愛いくて目の中へ入れてもいたくな
いと申しますが、全くその通りでございます。
皆様もいままに体験なさいませよ。でも短大発

足當時の方はもう御よろこびをお迎えになつ
ていらっしやるかもしれませんね。

先日、陶芸教室棟献堂式に御招待があり、
出席させていただきました。御立派な建物を拝
見致し、林学長先生はじめ先生方にもお目に
かかり、おなつかしく存じました。

また、この一月には初代学長相川高秋先生
の自叙伝「わが恵み汝に足れり」の御出版記
念会が三春台であり、先生御夫妻をはじめ、
柴先生、山下多恵子先生、大学の先生方にも
お目にかかれまして嬉しうございました。

短大には最近すばらしいチャペルが出来ま
して、入学式、卒業式も学校で出来る様にな
り、初代学院長、故坂田祐先生もどんなにか
御よろこびの事と存じます。

長年御活躍の香葉会長、古城房子様は教会
でも唯今、婦人会の副会長を連続なされ御活
躍中です。

昔の卒業生の皆様も是非、学校を見にいら
して下さいませ。何かあんまり立派になって、
こわくて近よれない等の声もききますので。
どうぞ皆様、ますます御元氣で御活躍下さ
います様、お祈り申し上げます。

思い出

荒木甚三郎

皆さん、お元気ですか。あの頃皆さんよく勉強しましたねえ。関東学院女専や短大の人は入学の時は学力は低いですが、卒業時には大変力がついていると言うのが当時の世評でした。日本全国の大学高専の英語弁論大会で中野ノブ子さんは第二位でした。卒業生は慶応や早稲田の英文科にそれぞれ二、三名ずつ入学し、全員優等生になりました。

初級中級英語の基礎学力をしっかりとつくることに熱意を注がれた大平先生の努力は貴重です。それにしても忘れられないのは、光畑先生のことです。英文の分析、シェイクスピア劇の指導などは一般の先生は出来るものではありません。声を暖らして指導しておられました。三春台での上演が今日の市内における上演の発端になったのです。

相川先生のような校長さんは珍しく、非常な御努力によって短大の基礎をお築きになりました。先生の御功績に心から敬意を表します。

日本の英語教育(外国語教授)の現状及び結果は本当に嘆かわしく思います。小生は昭

和十五年四月から二ヶ年間英語教育の名門旧制七年制武蔵高等学校に勤めていました。ここでは教科書は全部暗記、反意語などは生徒

自身が調べて覚えておくことになっていて、英語の書取は日本語を言われたのを英語で書くことになっていました。宿題など出したことはありません。他の学科でも同様で、平生週に二回以上の試験はしてはいけないうちに、特におられました。小生は最も若く、毎週日曜日の午後この英人教師の所へ英語の勉強に通いました。どんな学科でも教え方によって非常に効果があることをよく承知してましたので、鳥根大学英文科の主任教授に就任してから英文を覚えること、正しく美しく上品な読み方を身につけるよう指導しました。それで県立鳥根農科大学へ週一回出講しましたが、その先生も熱心な先生であり、僅か九十名の卒業生のうち毎年二・三名ずつ京大の大学院へ入学しました。県内の大田市の中学校では一年後の文部省の学力テストで英語は県第一になりました。

小生、昨年末で八十四歳になり、ひどい腰痛で困っていましたが、研究心は旺盛でして、

抜本的な英語教育改革について考え続けています。

(1) How goes the enemy?

== What is the time?

== What time is it?

(2) She had nothing to go in.

着ていくものがない。

(3) Leave these two houses unsold if

you can.

Don't sell these two houses

if you can help it.

売れば、売らないでおきなさい。

help it は avoid selling these two

houses の意。

もし if you can だけだと たとえ

売ることが出来るとしても

(1)は大学教授でも知っている人が少なく

(英国や日本の辞典にはのっています。)

(2)は一流大学院修士課程終了者でも知りませんでした。

(3)は普通の大多数の大学でこのような英文

を書ける人は死んでいません。

では皆さんの御多幸を祈っています。

平安な休息の日々

時 田 信 夫

この写真は昭和六十二年六月十九日、日曜礼拝に出かける途中でうつけしました。六十一年（八十七才）までは、藤沢の鶴沼教会を応援していましたが、六十一年九月、家内も天に送り、六十二年一月から、横浜教会に出席しています。

若い頃、スポーツできたえたおかげもあり、高台にある団地の四階に住んでいるため、毎日の上り下りがよい運動になるのか、足は、丈夫なほうです。近所の散歩だけでは物足りなくて、娘と一緒に、買物、訪問、見舞などに毎日出かけています。右目の視力は失いましたが、テレビでスポーツその他の番組を楽しんでいます。召される日まで、平安な休息の日々を過ごしたいと願っています。

昨年七月、横浜教会で米寿を祝って、「感謝の八十八年」という小冊子を出していただきました。

父はもう書き表すことができなくなっていますので見たままの父の近況を代わって書いてみました。

長女 純子



短大に友あり遠路来たる

柴 三九男

短大は新しい白亜の楼閣、こちらは古びた小屋に、しかしなお新道を開こうとする。乞御支援。老の心にこたえたのは、国文山下登喜子女史の召天。新チャペルで告別、これからというところ無念。一たび退院、こちらも同病院外科病室にいたこともあり、電話すると声で柴だとわかり、元気な声であったのが最後となった。何でも病は早期発見が肝要。がんばりそれがわかればよいのに、わからないからこわい。浦和よりまた遠くに移ったが、これは義妹の闘病のためで、この時も血液検査をしていたらといわれ、その学園では健康診断のためにもそれをする事になった。一周年記念をおくり、いまもバラやアジサイなどが室を明るくしている。その年間、卒業生姉妹は遠路お訪ね下さり「友あり、また楽しからずや。」中国旅行土産に、周恩来の像これは珍品、周恩来研究をやっていたからとあって感謝感激。実は目下奈良法隆寺研究、これは旧師の遺業、こゝ三年、旧友にも協力を求め、一時は駄目？、再起、旧師の考え方を確信、研究でも信じる事が大切。

英文故柳生直行大人は院長となり、「新約聖書」(新教出版刊行)出版記念もしたが召天は悲し、通読によろしい。表題も「イエスとトマス」とあって、「十二弟子の一人の、ドモと呼ばれるトマスは、イエスが現れたとき、その場に居合わせなかった。それで、ほかの弟子たちが、『われわれは主にお会いした』と言うと、トマスはこう答えた、『わたしは信じないね。その手の釘のあとをこの目の脇腹にこの手をつっ込んでみるまでは、わたしは信ずるわけにはいかない。』それから一週間ばかりたってから、弟子たちはまた家の中に集まっていた。こんどはトマスが一緒だった。戸はみな鍵がかけられていた。そこへイエスが入ってきて、みんなの真中に立ち、『祝福あれ』と言った。それからトマスに言った。「わたしのこの手を見よ。そなたの手をわたしの脇腹に入れてみるがよい。不信を捨てて信じよ。『わが主よ、わが神よ』とトマスはイエスに言った。『そなたはわたしを見たらから信ずるのか。見ないで信ずる者は、ほんとうに幸いだ』」(ヨハネ 20 24-28) われらも心の鍵をすっかり開き、師を見ないでも信じたい。

謎の法隆寺東京高島屋の展覧会で卒業生の一人にあった。木曜日、晴天の日東京国立博物館の法隆寺宝物館に案内するといひ不実行。誰でも案内します。

一つの回想と近況報告

横沢 四郎

私が相川高秋先生を中心とした関東学院女史専門学校で、英語と英米文学の教鞭をとったのは、戦後の荒廃が、まだ目前に展開しており、人々の多くは、いわば精神的荒野をさまよい、物質的には、困窮をきわめていた時でした。いまそのころのことを、記憶の世界にさがし求める場合、いくつかのことも、そこに散在していることに気づきますが、そのなかでも、きわだって光を放っているのは、岡の上の破壊の跡もなまなましい塔のある校舎を目指して、毎朝、坂道をのぼってくる女子学生たちの姿です。彼女らの顔にはうれいはなく、目は美しく輝いて生氣にあふれ、何かを追求していましたし、何かを支柱にして自己を確立しようという意欲を明確に示していました。私はこうした彼女らを目にした時、ともすれば崩れていきそうな自分の内的生活

を、一つの秩序のもとに立て直す力が与えられたのです。そうして、それから幾年か後、徐多恵子さんのお宅で開かれた英文科の同窓会に招かれて、妻と共に出席した私は、家庭の立派な主婦、教師、社会活動家になったかつての隆盛の中の女子学生たちに出会った時、深い感動を覚え、大きな喜びに満たされました。忘れることのできない出来事です。

私は女専の教壇を去りましてから、国立、私立の諸大学で教え、その間、イェール大学で、合わせて一年半ほど米文学、特にN・ホーソンの研究をしたり、胃かいようで手術を受けたこともありまして。今から三年前に、定年ですべての専任の職を退き、故郷の仙台に在任して、非常勤講師として、市内の一私大で米文学を教え、同時に研究を続けております。歳は七十八才。妻は仙台のY・W・C・Aの活動に時折、協力しております。子供は二人で、娘は短大の英語と米文学の教師。息子は会社員で、一男、一女の父親。最近、俗にいうアイヌ犬——生後三ヶ月の小犬がわが家の一員になりました。とても可愛いので、みなさんに見ていただきたいほどです。家は市内西北部の丘陵地帯にあり、ささやかな庭を縁どる けやき、ひまらや杉、かし、もみ

などの木々が、成長して、美しい緑の世界を見せ、私どもの心に、安らぎを与えてくれております。ご来仙の折は、ぜひお立ち寄り下さい。

みな様のご健康と、ご幸福をお祈りいたします。

菅井幸枝

主人の仕事の都合で関西に移り住んでから、かれこれ三十年くらいになります。その間、必ずしも横浜に無縁だったわけではないのですが、それでも、へえー、横浜に地下鉄があるの！などといっておどろいている仕末です。来年は主人が定年を迎えますので、私の生活にもいくらか変化があるのではないでしょうか。

ところで、皆様はポピン・レースというものをご存知でしょうか。ルーベンス画くところの王侯貴族の肖像画を思い出してください。男も女もきらびやかに袷を飾るレース、あれがポピン・レースです。糸巻（ポピン）に巻かれた糸を互いに交差させて組んでいくのは、日本の組紐と同じです。日本ではあくま

で線が終わったのですが、始め僧服を飾るブレードとして始まったヨーロッパでは、次第に線から面へと工夫されて、しまいはベツドカバーのような大作にまで発達したのです。

私は十年ほど前から、このポピン・レースにとりつかれて、レースの本場ベルギーや、フランスにまで出かけてきました。博物館、美術館などに数多く納められたレースの繊細さ、華麗さは、リルケが『マルテの手記』の中で天使の技と叫びたように、とても人間わざとは思えません。日本人は器用だなどと思いが上がっていたのが、それは人手を助ける機械化が遅れていたためだったのだと思いが知らされます。今更私がどうあせってみてもベッドカバーができるはずもないので、今のところ人形の服にせつせとレースをつけています。そのための人形作りにもはげんでいます。アンティーク・ドールから型をおこしたレプリカのビスクドールや、ねんどから自分なりに工夫したものなどを作っています。

そういうえば、青い目に一杯涙をためた人形が着いたのは、横浜のみなどだったのでしようか。あの赤い靴をはいた女の子とは、長い船旅の無りょうをなぐさめる人形ではなかったのでしょうか。

この頃短大で思うこと

兵藤正之助

先日ある所で黒人霊歌をきいているうちに、なにか良く知られている、もうむかしの人は誰もいない、山や川はそのままなのに……というのがある、そぞろ身につまされる思いのしたことでした。

三春時代、六浦のボロ校舎、そして今の短大らしい建物の時代……と考えてきましたね。それこそ「あのころの人は、だあーれもないなくなってしまった」からです。

ライオンとあだ名され、はえるように英語でしゃべっていた光畑教授。どこにいても一つ高く、流暢なイングリッシュで煙にまき、あの柳生直行さんはどこへ行ってしまったのか。いつも事務所の中で、几帳面にことを進めていた短大の大番頭上市さんの姿も見えなくなつてから久しい。そして慈母観音のようだった山下先生、等々、みなそうなんです。かく申すそれがしも。三十歳のかつての紅顔(?)は全く消え、頭を白髪におおわれるようになったのですから、いまさう人の世のうつろいを嘆いてみてはじまるまいとは思

いな、ながらもね、ついそんなことを考えざるを得ないですよねえ。

でもねえ、そうした時の流れに徒らにセンチメンタリズムをひきおこされながらもですよ、むかし在学生昼夜あわせて二百二十二名のこともあったのに比べ、今は五つの学科をもち在籍総数千七百余名の大所帯になったことや、乙女の園にふさわしい緑の芝生をなかに含んだ白い館が立ち並び、寒いすき間風など決して入らない(むかしはひゅーと入った)、授業中うつらうつらするには絶好の教室が数多く出来た上に、さらには賛美歌を快いパイプオルガンの伴奏できけるようになったチャペルも新築された現在の短大の盛況ぶりには、何としても嬉しい。むかし語りなど犬にくわれてしまえ、なんてことも思うわけですよ。

「このごろ関東学院って、世間の評判、とても良いですよ」とは、昨日ある場所で聞いた話。どうやらそのトップにあるのが短大らしい。益々よろこばしいねえ。

ばくに関してつまらぬことを言えば、最近出した『川端康成論』を皮切りに、およそ二十年ぐらいかかるんじゃないかと思われる仕事のプランを立てているんですがね、どこま

で実現されるかは、神のみぞ知るわけなり。同窓のみなみなさーまよ、益々元気で。尚、掲載は順不問です。

合同同窓会報告

総会が六月三〇日に開かれ、香葉会から幹事十名が出席しました。田中会長の辞任に伴い、各部会幹事四〇名の推選により、新会長に六葉会(六浦中・高)会長の田野井一雄氏(横浜市議会議員)が就任されました。幹事長は六葉会副会長の山口晃氏に決まり、若々しいコンビ誕生、今後の活躍が楽しみです。

学校法人理事は、燦葉会会長の交替により八月末に在任期間二年を残して国本前会長が辞任されましたので、慎重な審議の結果、燦葉会会長の三根守氏を推選する事に決定しました。指導力、実行力共に申し分のない方で良識ある発言が理事会に新しい風を入れて下さる事と期待しております。

燦葉会は去る八月二十三日、ヨットのオリンピック代表選手に選ばれた会員四氏の方のためにホテルリッチで盛大な壮行会を主催、古城は合同副会長として一言、ご挨拶申し上げました。ご活躍を祈ります。(古城記)

追悼……故山下登喜子先生をしのんで

国文科長 岡 松 和 夫



国文科教授山下登喜子先生は、昭和六三年一月十八日午後八時十九分、癌性胸腹膜炎のため、東京厚生年金病院で亡くなりました。五十四歳でありました。

先生は国文科ができました昭和四十一年四月以来専任者として勤務されました。私はその時以来の同僚であります。考えてみますと、二十二年が経過しております。その間何人もの先生が他大学に転じられましたが、山下先生と私は、言ってみれば不動のメンバーで、国文科の成長を支えてきました。

山下先生は近世文学、とりわけ俳諧を専攻され、学生たちにも芭蕉、西鶴、上田秋成などの作品を講じておられました。

先生のお人柄は、非常に円満で、私などは東京育ちのお嬢さんという感じで先生を見ておりました。我慢強い、苦痛を表に出さない方で、体の具合が悪いことなど一言も口にされません。頭痛のする日もあったでしょうが、そんなこと聞いたことがありません。しかし、いつだったか話をしていて、先生が引き出しをあげられた時に、セデスの箱があったのにはびっくりしました。

先生は、昨年の春に横行結腸に潰瘍ができていたということで手術されましたが、その時に、病院側で御夫君の山下一海先生（鶴見大学文学部国文科教授）に重い癌であると同時に、このことは親戚友人の全てに黙っておくようにと言ったそうです。御夫君はそれに同意され

て、亡くなる直前まで誰にも言わないで通してこられました。そのため、先生がこのように早く亡くなられるとは予期できず、病臥中なのに電話して相談を持ちかけたり、退職の御希望が出たのを無理に引きとめようとしたり、御迷惑をかけた点があります。

幸いに、葬儀は林学長、下田宗教主任の御尽力で国文科葬を本学礼拝堂で行うことができました。百数十人の卒業生も駆けつけてくれました。全体では五百人近い会葬者がありました。先生のことですから、大変恐縮されたことですが、やはり喜んで下さっただろうとおもっています。

左に先生の研究業績を記します。

〔著書〕

- 1、影印本「去来抄」（昭43・4・笠間書院）
- 2、影印本「三冊子」（昭44・4・笠間書院）
- 3、『中村俊定先生古稀記念論文集・近世文学論叢』（昭45・4・桜楓社）
- 4、『芭蕉講座（第一巻）』生涯と門弟（昭57・10・有精堂）

〔研究論文のうち主要なもの〕

- 1、去来におけるさびと不易流行論（昭40・9・連歌俳諧研究29号）
- 2、許六のさび（昭41・10・短大論叢29集）
- 3、去来・許六の論争課程における相互影響（昭42・12・短大論叢32集）
- 4、芭蕉の風兆評定（昭44・3・短大論叢36集）
- 5、去来の等類観（昭46・11・短大論叢44集）
- 6、「越人猫の句」をめぐって―芭蕉と去来―（昭48・3・短大論叢48集）

7、等類を超克するもの（昭49・5・近世文芸研究と評論6号）

8、「時雨はこの集いの美月」ということ

（昭50・10・短大論叢54集）

9、石田波郷と『猿★』（昭51・2・短大論叢58集）

10、「猿★は新風のはじめ」ということ（昭52・2・短大論叢57集）

11、芭蕉「かるみ」の生成（昭52・10・短大論叢58集）

12、芭蕉連句におけるかるみ（昭53・6・国文学研究65集）

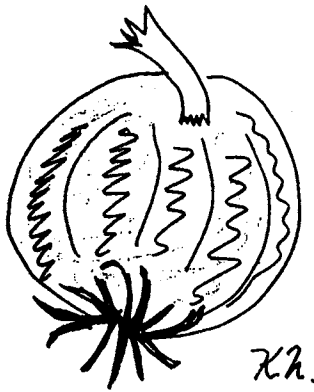
13、『おくのほそ道』の旅立ち（昭55・11・短大論叢64・65）

14、去來の「即興感偶」論——辛崎の松は花より朧にて」をめぐって（昭56・10・短大論叢66集）

15、許六作品の本質（昭58・1・短大論叢69集）

16、花の湖水のこと（昭59・10・短大論叢72集）

17、再び「花の湖水」のこと（昭60・7・短大論叢74集）



登喜子先生のこと

国文科四十九年卒業 太 宰 美紀子

今年が雨が多く暑い日の少ない夏でしたが、昨年の夏は猛暑でした。特に残暑は大変厳しかったと覚えていきます。その様な時、病後にもかかわらず、登喜子先生は、休講なさった授業の補講をなさいました。庶務課の窓口でお目にかかった先生は、少しスマートになっていらっしやいましたが、お声には張りがあり、久し振りの授業が楽しくて張り切っていらっしやるようにお見受けしました。「先生、お元気そうですね」という私の挨拶に「まあ！ほんと！うれしいわ」とあの甘やかなお声で、おっしゃいました。本当に嬉しそうなお顔でした。私は先生の子想外の反応に些か驚き、何故か心に残っておりましたところ、新年早々、先生の悲しい報を聞きました。そして、私にとってこの先生との短い一コマが忘れられない思い出になったのです。登喜子先生とは授業で教えていただいた学生時代を別にすると、職員となつてからの十五年もの間に余りにも接点が無かったことに驚いています。先生は猫が大層好きで、多くの猫を飼っていらっしやることもおそくなつてから知ったのです。そして、登喜子先生は、私にとって恩師である以外に、働く女性として、主婦として、母として大先輩であり、教えていただくことが沢山あったのにと、今さらながら本当に残念です。

庶務課の窓口ではついお見かけすることが少なかったもので、今でも先生がひよっころお顔を出されるような気がしてなりません。先生のご冥福をお祈りして拙文の筆を置きます。合掌

香報室



この欄は、卒業生の皆様の消息、感想文、等の発表の場として用意いたしました。今回も引き続き、昨年の講演会出欠通知から無断で転載させていただいておりますが、短大香葉会「香葉」編集局宛、次号への原稿などお送り頂ければ幸いです。

入社してはや三年目。短大時代に勉強した

食物栄養とはまったく縁のない半導体分野での物理解析の仕事。ようやく慣れたこのごろですと言いたい所ですが、まだまだ半人前。

このたびのチャペルの完成とても嬉しく思っています。キャンパス内の雰囲気、私達が過ごした二年とは、大きく変わっていることと思います。喜ばしい事でもあり、ちょっぴりさびしい気もします。これからも短大のますますの発展を期待しております。

(東芝マイコンエンジニアリング ㈱)

横浜市緑区 高木晴美 60食

こんにちは。四月から社会人となり、なんとかやっと一人前らしく仕事もできるようになってきました。私の場合、短大時代より通うのが楽になり、(現在バイクで十分です。)運動不足になってしまいそうです。

仕事も順調ですが、もう一つの楽しみは、大阪へ行くこと。実は私にも彼氏ができたのですが、残念ながらその人は大阪勤務。月に一回会えるくらいですが、少ない給料をはたいて、シンデレラエクスペンスしてがんばっています。みなさんも元気ですか？
そのうち会いたいですね。

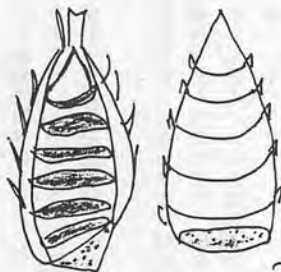
(松下通信工業 株式会社)

横浜市緑区 鹿島恵美子 62生

三月より転勤で九州へ来ております。自然の恵みの豊かなこの地で、三人の息子も元気に伸びやかに育ってくれております。

国文科長の岡松先生の生地は福岡であられることを、この地の図書館に通う日々知りました。わずかなひまを見つけては岡松先生の小説に、読書の楽しみ、よろこびを見つけられている頃でございます。岡松先生のお人柄をはぐくまれた、九州の地のよさを私ども家族五人も、満きつさせられているしあわせな日々感謝します。皆様の更なるご活躍をお祈り申し上げます。

久留米市 松本(高島)悦 50英



香葉会誌お送り頂きまことに有難う御座います。卒業してから長い歳月が過ぎ去りましたが、会誌が送られるたびに楽しかった学生時代がともなつかしく思い出されます。それにつけても、なつかしい先生が少なくなっていくのは本当に淋しい限りです。やっとなの子供（三人目）がこの春大学を卒業し、ほっとしております。これからは少しは自分の事が出来る様になるかと思っております。

今健康管理の為にと思いゴルフを少し習い始めました。なお古い卒業生の消息などの掲載がもっとあればと願っております。

船橋市 川越（中村）佳子 29家

校訓人になれ奉仕せよ、四四才を過ぎやっとなになる事のむずかしさを痛感しております。反省の意味もかねこのところ点訳を習っております。とても奥深くむずかしく盲人の方の読解力に頭がさがる思いで一杯です。

香葉は楽しみに読んでおります。今回は大好きな鳥越先生のニュース、相川学長（私どもの時代）の自叙伝のニュース、胸が踊る想いで読みました。ぜひ相川先生のご本を手にとりたいと今から期待しています。予期せぬ贈り物、香葉は主婦専業の私の宝です。

大田区 白土（加藤）喜代子 39家

主人の仕事の都合でパプア、ニューギニアで結婚を致しまして、たゞいま日本に帰ってきております。外国へ行き、つくづく感じました事は、語学力の重要さでした。近々英語を習い、又の外国行きにそなえたいと思っております。短大での楽しかった英語の授業がなつかしく思い出されてまいります。

横浜市六浦 武下（坂本）千文 58食

今年八月三一日結婚式をあげ、六三年には一児の母となります、卒業してはや五年。こちらからはなかなか横浜の方にも行けず、短大時代の友人達とも遠ざかってしまう毎日です。金沢の方の中にも関東学院の短大の卒業生がたくさんいると思えます。その人達と連絡がとれればと思えます。ぜひおしえていただけませんか？これからの短大のご成長を楽しみにしています。

石川県 永薬（室田）涼子 58食

三十年卒業後、中学校に勤務し来春定年を迎えるにいたりました。牧師の娘と結婚し三十年にその父から下田で洗礼を受けました。

CS校長十五年も勤め今年辞任しました。

五人子供がありますが一人だけ受洗した娘がおります。同志社大を卒業し西陣文化センターに出ています。

母校の充実発展を祈っております。特に大学に法学部の新設を望んでおります。総合大学として東北からも多くの人材を募集できる大学になってほしいものです。

岩手江刺第一中学校 千田節男 30英

必読！香葉会からお知らせ

短大祭日程変更

今年から十一月三日（文化の日）を使います。学生の就職活動に支障がない時期にという学校側の方針の為です。今年は十一月二日三日ですが、香葉会は三日に演奏会と喫茶室を主催します。ぜひ、お出かけを！
名簿

来年二月末に、十年ぶりに新名簿が出来ます。この一年、名簿委員と事務局は大変な苦労と膨大な時間を費って整備と準備をしました。香葉会活動援助の一端としてぜひお買上げ下さい。申込みをお待ちします。

母校ニュース

〈新学長に下田哲教授就任〉



九月一日、チャ

ペルに於いて、新学長の就任式が執り行われました。

新学長に就任された下田哲教授は、

昭和三十八年より短大の専任として宗教主事、主任を歴任され、母校のキリスト教教育を支えていらっしゃいます。

〈陶芸教室棟が完成〉

家政科生活文化専攻の科目の「生活芸術」の中にある「陶芸」を実習する陶芸教室が完成し、五月より陶芸実習を開始しています。

この陶芸教室は、土陳室・ろくろ室・大型の電気炉、ガス炉ならびに試験炉をもつ窯場・ゆ葉調合室・研究室・展示陳列室などを持つ本格的な建物です。

学生達の多彩な感性から生まれ出る作品は、食



器、アクセサリー、額、装飾品にと、多種多様です。実習授業が軌道にのれば公開講座なども開いてみたいとのことでした。

〔学報より〕

〈公開講座「女性と生活文化」開催〉

今年も十月五日、十二月十二日の毎週水曜日、全十回の予定で生活文化研究所主催の公開講座が開かれています。神奈川県教育委員会の委託を受けて行っているもので、今年で四回目になります。卒業生の皆様にはこの「香葉」発行と時期が合うため、事前のPRができませんが、来年も秋に行う予定とのことです。詳細は来年八月の県広報紙「県のため」に掲載されます。講座の一部を紹介いたしますと、「日本型食生活と栄養」林淳三教授、「食糧生産とバイオテクノロジー」太田安定教授、「食生活における嗜好と伝承」山口和子教授、「小児の環境と食行動」真坂孝二教授、等々食生活を中心に講義されます。毎年五〇〇名程の応募があり、抽選で二六〇名程の方が受講しています。〔学報より〕

〈家政科食物栄養専攻二十年記念会開かる〉

前日までの悪天候がウソのように晴れ上がった

た七月三十日（土）チャペルに於いて、食物栄養専攻が設置されて二十年の記念会が開催されました。食物栄養専攻の卒業生が中心となり、家政科の先生方、教務職員の間にも全員参加し、盛大な記念会でした。当日林淳三教授の講演会、レセプションと続き、二〇〇名近い参加者の方々も大変満足し、盛会のうちには終了いたしました。

〈海外研修、カナダで実施〉

本年度の夏期海外研修はカナダのブリテッシュ・コロンビア大学で、七月三十一日より三週間行われました。全員ホームステイしての研修です。皆ノビノビと可能性を求めて勉強してきました。今回は特に林学長も視察に行かれ、学生達の歓迎を受けていらっしゃいました。



〈新任教職員紹介〉

- 伊東光浩先生 国文科 講師
- 佐々木まどかさん 家政科 教務職員
- 森山美季さん 幼児教育科 教務職員

昭和62年度 決算

63.3.31.現在

収 入 の 部	予 算	決 算	増 減
会 費	8,201,000	8,201,000	0
賛 助 金	400,000	620,000	220,000
委 託 販 売 手 数 料	350,000	1,108,457	758,457
預 金 利 息	10,000	12,781	2,871
雑 収 入	5,000	147,772	142,772
前 年 度 繰 越 金	1,824,577	1,824,577	0
合 計	10,790,577	11,914,587	1,124,010

支 出 の 部	予 算	決 算	増 減
通 信 費	2,200,000	1,768,440	431,560
印 刷 ・ 製 本 費	1,000,000	992,154	7,846
総 会 ・ 会 合 費	1,000,000	897,073	102,927
交 通 費	160,000	196,660	△ 36,660
用 品 費	300,000	213,445	86,555
備 品 費	40,000	58,220	△ 18,220
委 託 費	150,000	0	150,000
謝 礼 費	100,000	5,000	95,000
消 耗 品 費	30,000	27,526	2,474
人 件 費	1,200,000	1,328,600	△ 128,600
合同窓会分担金300×755	226,500	226,500	0
新 入 会 員 歓 迎 費	1,100,000	1,040,350	59,650
名 簿 発 行 準 備 金	700,000	700,000	0
特 別 会 計	500,000	500,000	0
雑 費	84,077	60,852	23,225
予 備 費	500,000	370,330	129,670
坂 田 記 念 会 館 寄 付 金	1,500,000	1,500,000	0
名 簿 発 行 準 備 不 足 金 補 充	0	439,772	△ 439,772
次 年 度 繰 越 金	0	1,589,665	△ 1,589,665
合 計	10,790,577	11,914,587	△ 1,124,010

クラス会報告

へ英文科三十六年卒クラス会



毎年皆様にお会いできるのを楽しみ、A組・B組合同期会を開いております。今年は、久し振りに母校ではという希望があり、折りしも、短大祭が行われるという、十一月二十一日に決めました。当日は、さわやかな秋晴れの日で、二十五名の方が出席して下さいました。昨年出席していただいた、小玉敏子先生は、ご都合で欠席されましたが、とても楽しい一日を過ごすことができました。三月に完成したチャペルも見学することができました。今回同期会を開くにあたり、香葉会事務局の方には大変お世話になりありがとうございます。最後に皆様の会費の一部をチャペルの建設資金として献金させていただきますことをご報告させていただきます。

紙 透 洋 子

へ英文科三十八年卒クラス会

落ち葉の散り敷く季節となりました。先日は、香葉会の先輩の方々には、大変お世話になりました。

昭和六十二年八月二十九日。三十四年振りのクラス会を、横浜東急ホテルで行うことができました。十四名（子供一名）の参加でしたが、皆様それぞれ関東学院のカラ―を色濃く持ち続け、良い年輪を重ねていらっしゃいました。お会いした瞬間、学生時代にタイムスリップしてしまい、自己紹介もかけ声をかけあい終始なごやかなムードの大変楽しい会となりました。

同期生の皆様ご一報下さい。

中村（国府）智子



賛助金をご寄付くださった方へのお礼とお願い

今年も後記の方々から総額「六十四万九千円」をお送り頂き、厚く御礼申し上げます。諸物価の値上げにより、年々「香葉」の発行がむずかしくなっておりましたが、卒業生唯一の雑誌をなくしたくないと、編集員一同がんばっておりますので、今後共賛助金の御協力をよろしくお願い致します。

岩堀迪子	月本鈴子	松田良子	土屋幸枝
錦織マサ子	笠木茂伸	高山政子	永吉和子
白鳥美智子	山内晴美	兩宮慶子	大井法子
桐山千江子	布施里佳	杉山愛子	水野喜美
関谷由利子	中川あや	伊沢敏恵	川越佳子
霜鳥三枝子	須田広子	近藤早苗	鉦田明美
森野恵理子	肥沼匡子	鈴木久恵	住吉桂子
主馬野敦子	岩瀬信子	熊谷君代	中村智子
清田恵美子	石井明美	黒沢優子	大島好恵
福田しほり	岡本悦子	堀越康子	勝原明美
斉藤恵美子	安念和美	片岡純子	平野綾子
山崎由紀子	玉木宮子	積田昌子	土岐房子
肆矢三佐子	佐藤薔薇	石守あみ	飯田芽子
山本瑠美子	石渡久子	渡辺和子	川島久里

岡部安耶子 岡崋幸恵 古郡綾子 押野澄子
 リーディ実子 時田信夫 佐藤晴恵 原央子
 佐々木晶美 見目光江 松本佳子 小野ふみ
 岩野由美子 松本紀子 近藤鶴子 遠田順子
 上川奈緒子 細野清美 小菅真子 三浦裕子
 高重久美代 土屋明子 高野良広 鶴見智子
 飯田ゆみ子 馬場直子 井田玲子 安藤憲子
 白石真砂子 有田玲子 福岡浩子 菅野弘恵
 吉原美重子 高橋静子 大畑幸子 山屋俊子
 菅原千代子 高田泉子 田村直子 菊地和子
 松本智恵子 土山忠 夕ハ茜 多々良由紀子
 上原いく子 露木球恵 吉田年江 佐藤充代
 佐藤三千子 徐多恵子 浅葉勝美 永末智子
 武部久美子 田中久恵 高橋玲子 小島純子
 竹内恵美子 石川和美 千田節男 柳川礼子
 福岡世紀子 芳垣恂子 寺内雅子 森谷昭子
 長谷川房子 斎藤一正 山本長生 田牧洋子
 田辺美紗子 田中晴子 大坂恵子 伊藤陽子
 日原美登里 外山栄子 小山郁子 作山智子
 成田千和子 鈴木葉子 久保弘子 山口周子
 田丸瑠実子 木村燁子 岸本有加 澄谷亮子
 河内千華子 保田幸 後藤美和子 斎藤比子
 中村はるみ 相澤泰子 高野絢子 篠原愛子
 小野奈美恵 平井四方子 岸澄子 金田祥子
 金子美佐江 舟橋佳寿美 益昌子 三富正枝

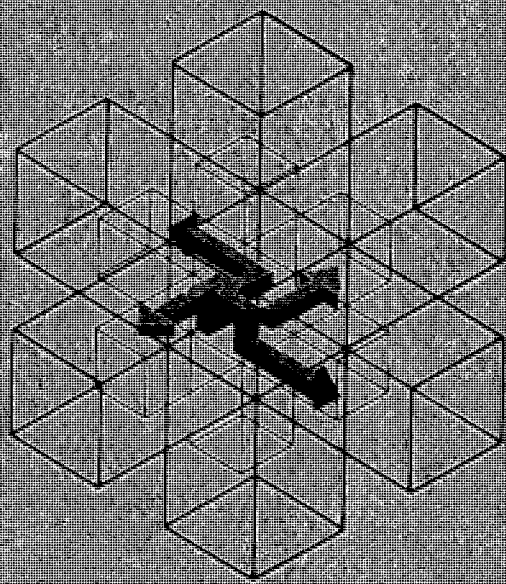
小林千鶴子 出榮美子 金子貞子 佃美智子
 八木智恵子 佐藤洋子 志賀ミチ 安久町子
 小林寿恵子 柳生二三 吉屋保子 相吉典子
 小川美恵子 高橋賀子 和田澄恵 栗原康子
 青木千恵子 相吉典子 吉川雅子 坂井満代
 江成千恵子 天羽富江 高橋秀子 小山邦子
 長谷川有紀 今井恭子 齊藤道子 辰沼滋子
 関谷由利子 安彦潤子 佐藤美代 紙透洋子
 古城房子 中村智子 相原梅子 永井八千代
 長谷川不二恵 松岡佐多子 馬屋原絹子
 女専合同クラス会 井上多恵子 鈴木恵美子
 飯田染子 大石豊代子 佐藤久子 瀧上龍美
 石田楨子 小島美峯

編集後記

今回の香葉は、いかがでしたでしょうか。
 今回の香葉は、いかがでしたでしょうか。
 いつもとは違い、少々早目に会員皆様の手
 元に到着したと思います。短大祭の変更に
 伴い、香葉発行が早やまった為です。その
 ため、毎号掲載しておりました旅行記が残
 念ながら記事が間に合いませんでした。今
 年度分の旅行記は、来年号には掲載いたし
 ます。

又、今回号より新しい企画といたしまし
 て、本学を離れ、定年を迎えられて久しい
 先生方の、現在の様子、思い出などのお便
 りを、載せました。若い方々には、馴染み
 のない先生方が多かったですでしょうか。案外、
 あの先生に習ったのではと思われる方もい
 らっしゃるでしょうか。今後、順次、先生
 方の近況を聞きたい方、知りたい方、香葉
 会編集部あてに、御連絡下さい。又、先生
 方のお便りもお待ちしております。

今回、記事を送ってくださった学長先生
 を始め、諸先生方、会員の皆様、御協力あ
 りがとうございました。今後ともよろしく
 お願いいたします。香葉会編集部一同



後輩へ就職求人を!

本学卒業生の就職率は90%以上、卒業生の実績が実を証し、毎年卒業生定数約3千名倍に達する求人があり、高水準のインターンシップに立派な成績をあげておられます。しかし、地方出身者に関しては、短大卒業生を受け入れる職場が少なかったのを、専攻卒業生と比較し、対処に苦戦に覆れ、最近増加傾向の短大卒業生と同様の就職採用を、按察及び管轄の各法人の是非、上機時、おこなうための、短大生に採用の希望が、おこる、短大生に就職機会を、お与え、お願ひいたします。

〒235 横浜市長沢区大浦町4334 電話 (045) 784-1491 (5255-281)

関東学院女子短期大学就職課

香葉 第17号

〒406 2年9月30日 印刷・発行
関東学院同窓会・香葉会

代表者 古橋 啓子

静岡市金沢区三浦町4034 郵便番号 4226

関東学院女子短期大学内

電話 (045) 784-1491 (内線216)

関東学院同窓会・香集会誌